



今年は、4つの目標をめざしています！

日本のご支援者の皆さま、お元気でお過ごしですか。タイは一年で最も暑い雨期を迎えておりますが、子どもたちも親たちもスタッフたちも、皆さまのご支援に励まされて日々しっかりがんばっております。

おかげさまでドゥアン・プラティープ財団は1978年8月の創立以来、今年で37年目を迎えています。タイ国の政治・経済状況はなお忍耐強く見守って行かねばなりません、どのような厳しい事態にあっても子どもたちが一人でも多く安心して学び、暮らしてゆけるよう努力していかねばと心を新たにしています。そのために2015年は、4つの目標を掲げました。

1. クロントイスラムには近年、カンボジアやラオスなど近隣諸国からの外国人ワーカーが増えています。財団では、出稼ぎ者やその家族と子どもたちのタイ語やコンピューター学習等を支援する。
2. 各学校で出される宿題やレポートをパソコンでやる課題が増えているため、財団にIT学習の設備を整える。
3. 無農薬・有機肥料を活用した野菜園を「生き直しの学校」等に開設する。
4. スラムの子どもたちの教育に熱意を持って取り組む先生たちの表彰制度を新設する。

以上の目標実現のためにしっかり取り組んで参りますので、これからもくれぐれもよろしくご支援下さい。

ドゥアン・プラティープ財団創設者

プラティープ・ウンソンタム・秦

スラム地区の子どもたちに歯磨き粉を贈呈

神奈川県議会日・タイ友好議員連盟の敷田博昭会長のご協力を得て、日本ゼトック株式会社から6,000本の子ども用「歯磨き粉」が寄贈されることになりました。関税等の手続



き面では、まもなくタイ王国大使としてフィリピンに赴任されるのタナティップ・ウパティシン氏（前駐日タイ王国大使）とモンティップ夫人にご尽力をいただきました。

そして、ウパティシン大使ご夫妻が新任地に向かわれる直前の3月2日、主賓としてお迎えして、園児たちに歯磨き粉を贈呈していただきました。当日は、園児たちに対して口の中を清潔に保つように講習を行なって、歯の正しい磨き方についても実演しました。

最後になりましたが、ウパティシン大使ご夫妻、日本ゼトック株式会社様、敷田会長様のご厚意に対して心より厚く御礼申し上げます。

米・タイ両国の学生がスラム地区の「飲料水」の水質検査



アメリカ・マサチューセッツ州にあるウースター工科大学の学生たちがタイのチュラロンコン大学の学生たちと合同で、1月から2月にかけての2週間、クロントイ地区の飲料水の水質検査を行いました。その結果、病原菌は検出されなかったものの、3か所のコミュニティに設置している飲料水機器はフィルターの交換や定期的なメンテナンスが実施されていないことが分かり、今後改善を進めて行くことになりました。

検査に訪れたのはフェビアン・ミラー教授とボブ・キニッキ教授の下で学ぶ学生4人で、チュラロンコン大学の学生4人と合同で進めました。検査結果は、各地区代表にドゥアン・プラティープ財団に集まってもらい発表会を行いました。

また合同チームは、プラティープ幼稚園を訪れて、園児たちに面白くて分かりやすい方法で、手洗いの大切さなどを教えました。学生たちは手に付けた染料が、握手した相手の手のひらで黒っぽく光る実演を行い、「ばい菌は目に見えないけれど、こうしてほかの人に移って行くよ」と説明し、園児たちも驚きながら学んでいました。



「貧しい子どもたちに本を送る運動」にご協力下さい



ドゥアン・プラティープ財団では、タイ国内のスラムや遠隔地など貧しい地域の1,000校の小・中学校に1セット20冊の本を送る運動を始めることにしました。1セットの書籍代と送料は2,000バーツ（約7,500円）です。皆さま、ぜひご協力下さい。

プレゼントする本は、仏教の教えに関する本や外国の習慣を知る本、英雄の物語や芸術・音楽のプロになるにはどんな努力をすればよいかなどの書物です。タイでもインターネットの普及はめざましく、子どもたちはパソコンで様々な知識や情報を得ていますが、全国各地のスラムや遠隔地の山岳地帯などの学校や子どもたちはまだまだそうした機会に恵まれていません。そのため財団では、一人でも多くの子どもに絵本や本に出会ってもらおうと1セット20冊キャンペーンを始めることにしました。

1セットでも2セットでも結構です。「ほほえみ」最終ページの銀行までお振り込み下さい。寄贈者のお名前を添えて、各学校にお届けします。

インド洋大津unamiから10年 親や兄弟姉妹を失った子らも元気に成長しています



2004年12月26日、スマトラ沖大地震で起きたインド洋大津unamiではタイ西部パンガー県のタクアパー郡を中心に多数の死傷者や甚大な被害が出ましたが、それから10年、ドゥアン・プラティープ財団では津unamiで親や兄弟姉妹を失った孤児たちを支援する『バーンターンナムジャイ』（思いやりの家）を中心に今も地道な活動を続けています。

発生直後から「津波復興プロジェクト」を立ち上げて被災者の救援にあたり、辛い体験をした子どもたちの心のケアをはじめ人形劇の上演、職業訓練のためのろうけつ染めなどを行いましたが、特に力を入れたのは孤児になってしまった子どもたちのサポートです。財団では津波発生から2年後の2006年、オーストラリアの慈善団体の協力を得て孤児たちが共同生活できる2階建ての『バーンターンナムジャイ』を開設、当初は22人の入居者でしたが、その後増え続けて現在102人が一緒に暮らしながら勉強や職業訓練に励んでいます。

今では地元自治体の認可も得た施設となり、手工芸品の製作や野菜栽培、伝統舞踊の修得なども行い、子どもたちがやがて自立してゆけるよう心がけています。しかし、施設周辺の地域では家庭崩壊や児童虐待なども起きており、財団では少しでも子どもたちの生活と教育環境が良くなるよう地域の人々と協力して改善策に取り組んでいます。

67歳の財団職員、ニッタヤさんが大学院修士課程を修了 「次はソーシャルワーカーの国家試験にチャレンジします！」



ドゥアン・プラティープ財団のスタッフとして31年間、クロントイスラムの子どもたちの支援を続けて来たニッタヤ・プロムポーチュンブンさん(67)が2月8日、首都バンコク郊外にあるホアチャオ・チャルムプラキアット(華僑崇聖)大学大学院修士課程を卒業し、「社会活動と社会福祉」を修めた修了証を授与されました。次の目標は、今年行われる国家試験を受けて「ソーシャルワーカー」の資格を得ること。「いま思うと、貧しかったことが自分もがんばり、他者にも思いを馳せる原点になりました。必ず資格を取って、貧しさがもたらす様々な困難に苦しんだり、学べずにいる子どもたちのために、もっと力を尽くしたい」と抱負を語っています。

ニッタヤさんはふるりの農業では暮らしてゆけなくなり、二十歳の時、夫と共に3人のおさな児を連れてクロントイスラムにやって来ましたが、36歳のある日、プラティープさんに出会ったのが転機になりました。住んでいた一帯が火災で焼け出された時、プラティープさんが救援物資を持って駆け付け、自分の娘たちも並んで受け取っているのを目の当たりにしたのです。

「それまでの私は、毎日をどうやって生き延びて行けばよいかに無我夢中で、他者を思うことはなかった。貧しさのどん底にいる人々を少しでも救おうとしているプラティープさんのことを世間は世の中をひっくり返そうとしていると非難していましたが、ものともせず子どもたちのために尽している。その姿に感銘を受け、お手伝いをしようと思い決めました」

当時スラムでは麻薬がはびこり、大人の密売人が警察に摘発されないよう子どもたちを運び屋にしたり、言いなりにならない子どもにまで麻薬の注射を打って中毒にさせていました。見かねたニッタヤさんがプラティープさんに相談すると、「一緒に子どもたちを麻薬から護りましょう」と資金を出したり、募金活動を始めてくれたのに感銘を受け、「わが子を麻薬から護ろう！」とお母さんたちとグループを立ち上げました。

やがて麻薬の注射づけにされた子どもや青年たちは病院の協力を得て治療を受けさせて立ち直らせたりしている努力が国連にも注目され、39歳になった時、ドゥアン・プラティープ財団に麻薬撲滅のため500万バーツ(当時約5,000万円)の推進資金が供与されたのを機会に正式な財団職員になりました。以後、麻薬に染まった子どもたちを立ち直らせる『生き直しの学校』の促進や、エイズに罹ってしまった患者と家族の救援活動を続けて来て、昨年4月からは新たに創設された「ムニティ・プロムチャイ・パタナ(心の開発)財団」の事務局長を務めています。

タイでは2年前、法律が改正され、プラティープ財団が開設している『生き直しの学校』のような児童施設は、国家試験に合格した「ソーシャルワーカー」の配置が義務付けられました。資格取得者には、たとえ実の親でもわが子を虐待して命に危険があると判断した時は親の手元から引き離して保護することが出来るようになりました。ニッタヤさんは長年の経験を活かし、まずは受験に必要な大学院での勉強に挑んだのです。

授業は毎週土、日の2日間。朝9時から遅い時は夜8時まで集中して指導教授の下で学び、卒業に到達しました。67歳での修士課程の修了者は同大学の創設以来初めてで、立ち退きを迫られたスラムの住民の間を丹念に訪ね歩いて仕上げた修士論文は高く評価されています。

「ニッタヤさんの成功は、人は幾つになっても学ぶことが出来る、忍耐強く努力すれば目標を達成できることを示しており、財団職員はもちろん、多くの人々の励みになります。スラムでの豊富な活動実績があるので、きっと国家試験もパスして財団のソーシャルワーカー第1号になってくれるでしょう」。プラティープさんは、そう喜びと期待を語っています

ご支援いただいた皆さま、4年間本当にありがとうございました 出田 夏紀

ご支援者の皆様、里親の皆様、こんにちは。私は、2011年6月から2015年3月までプラティープ財団教育里親事業部のボランティアスタッフとして働いていました出田夏紀です。この度は、4年間の想いを綴らせて頂けることに、心より感謝申し上げます。

私の主な仕事は、奨学生から里親様へのお手紙や、奨学生の履歴書の翻訳、日本語の書類作成、里親様との連絡調整などです。里親様とタイ人スタッフや奨学生との間で調整する立場であり、大変な事もありましたが、何よりも双方の気持ちを誰よりも近くで知ることができ、多くのことを学ぶことができました。

大学時代にボランティアについて学んでいた頃は「ボランティアをするなら現地に行くべき」と熱く思っていました。しかし、奨学生の就学のために毎年奨学金を送ってくださる里親様、奨学生に会うためにタイまで足を運んでくださる里親様、奨学生に励ましのお手紙やプレゼントを贈ってくださる里親様に会い、誰かの力になることは、隣で支える以外にも多くの方法があることを改めて教えて頂きました。微力ではありましたが、里親様からの想いを奨学生に伝えるお手伝いを出来たことを、心より嬉しく思います。

反対に、里親の皆様「奨学金の打ち切り」という形で、大変残念なお知らせをしなければならぬこともありましたが。財団スタッフは奨学生が勉学を続けられるよう、家庭訪問や話し合いを繰り返しています。しかしながら、思春期にある子ども達の気持ちの変化に家族も財団スタッフも追いつくことができない場合もあります。また、家族から勉学に対する応援を得ることが出来ない子どもたちや、不安定で少ない収入しか得られず日々の生活で精一杯の家族にとって「勉強」の優先順位は大変低い場合もあります。タイ・バンコクは大きく発展し、スラム地域の衛生環境も向上していると思います。しかし、スラム地域の住民たちが抱える貧困の問題や家族間の問題は、まだまだ山積みです。里親の皆様、どうか子どもたちの置かれている環境にご理解を頂き、今後とも子どもたちに温かいご声援とご支援を頂きますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、いつも温かく、そして時には厳しいご指導をくださった里親の皆様、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。私はプラティープ財団を離れることとなりますが、今後は翻訳ボランティアとして、里親様と奨学生との架け橋となれるよう、微力ながらお手伝いをしていきたいと考えております。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

皆さま、初めまして よろしくお願ひします

西尾 茉希



私は西尾茉希と申します。11月末から財団の教育里親事業部でボランティアスタッフとして仕事をさせて頂いています。私は大学生の時に、ドゥアン・プラティープ財団を知りました。プラティープ先生やミンポン先生と出会ってお話を伺ったり、「生き直しの学校」を訪れて実際に子どもたちと接し、財団で働く職員の方々を見てきました。財団や「生き直しの学校」を訪れるたびに、私もこの人たちと一緒に仕事をしたいと思うようになりました。一度日本で仕事に就きましたが、それでもこの財団への思いが変わることがありませんでした。そして今、私はドゥアン・プラティープ財団でお仕事をしています。教育里親事業部の仕事は直接子どもたちと触れ合う仕事ではありません。しかし日本の教育里親の方々と子どもたちをつなぐ大切なお仕事だと思っています。タイ語もほんの少ししか話せず、まだまだ未熟で周りの職員の方に助けてもらってばかりですが、少しでも子どもたちや、その子どもたちを支えてくださる里親の皆様にかたければと思ひ、これからも財団でお仕事を続けていきたいと思ひております。

プラティープ財団
The Duang Prateep Foundation
Lock6, Art-Narong Road, Klong Toey
Bangkok 10110 Thailand
Fax : 001-66-(0)-2249-5254
Tel : 001-66-(0)-2249-3553, (0)-2249-4880
E-mail : dpf_found@hotmail.com
duangprateepf@gmail.com

ホームページ:<http://jp.dpf.or.th>
銀行口座：三井住友銀行バンコク支店
口座名：The Duang Prateep Foundation
口座番号：2041159421
送金の際はご住所、お名前、ご送金の目的等
を当財団国際部までご連絡下さいますようお願い
申し上げます。

奨学生紹介

「女子キックボクサーをしながら勉強しています！」

～ダワーン・サガンシーさん～

ニックネームは「ニィウ」と呼ばれているダワーン・サガンシーさんはいま19歳で、高校3年生。財団の奨学金を高校1年の時から得て勉強を続けていますが、ぜひご紹介したいのは、タイでも珍しい“女子キックボクサー”のアルバイトをしながら厳しい家計を支えていることです。



父は警備員として働いてはいるものの、母は失業中。クロトイスラムの中心部にある家屋は老朽化が激しく、屋根の一部が欠けているため雨漏りして落ち着いて眠ることが出来ない生活が続いて来ました。増え続ける借金がもとで両親がよく喧嘩をするのがとても悲しく、辛いので、自分も働いて助けようと思い立ち、お寺の境内で催しごとある時に国技のキックボクシングの試合が披露されるのに出場するようになったのです。

キックボクシングは幼いころからよく試合に連れて行ってくれた祖父に教えて貰っていましたが、中学生になってから本格的に習い始めました。試合に出ると、勝敗に関係なく1回に800～1,000バーツ（1バーツ＝3.7円。約3,000円～3,800円）貰えます。試合がない時は、ショッピングセンターやスーパーでもアルバイトをして、今では毎月平均8,000バーツ（約30,000円）の収入を得られるようになり、半分を両親に渡し、残りを勉強に役立てています。

常に良い成績を保って来たニィウは、3月末に高校を卒業し、大学進学を目指しています。「法学部か社会福祉学科がある大学に進みたい。卒業したら困難な生活や立場に置かれている人たちを助きたい」。奨学金で支えていただいていることに心から感謝しながら、練習と勉強に励んでいます。